

視点(1785)

(思考と研究の概念編)

おぼかたはるこ

小保方晴子さんの画期的成果!!

1月30日に全ての新聞に「iPSを超える万能細胞」として、理化学研究所発生・再生科学総合研究センターの研究ユニットリーダーである「小保方晴子さん(30歳)」の万能細胞の大発見が発表されました。

万能細胞に関しては、ノーベル賞を授与された山中伸弥教授(京都大学)が有名ですが、簡単に言うと、小保方さんのSTAP細胞(遺伝子を刺激)は山中教授のiPS細胞を超えている万能細胞ということです。しかし、iPS細胞(遺伝子を操作)の医学上の応用は実践段階にあり、STAP細胞はまだ基礎研究のレベルであり、将来の可能性に置いては大きな成果が期待できるものの、今は人間実験のレベルではなくマウスの実験レベルであり、まだまだこれからというのが本音のようです。

私はSTAP細胞の発見において2つ「いいね!!」と思っていることがあります。

①まず第1に「若い女性」の画期的発見であること

小保方晴子さんは30歳の女性です。今、日本の未来を考えたとき、現在の若者(20代から30代)の能力を高めることが必然です。かつ、現在は諸外国に比べて低い女性の社会進出と能力活用機会の創出が必要です。その意味において、小保方さんの快挙は若者や女性への能力向上への意欲を高める刺激になります。

②次いで「iPS細胞とは全く異なる次元で、かつ誰もが信用できなかったレベルで」の画期的発見であること

今回の大発見は山中教授のiPS細胞の応用版ではなく、多くの生物学者や医学者があり得ないと思っていたレベルであり、全く新しく、かつ異なる次元の発見であり、まさに画期的な発見でした。これで、iPS細胞とSTAP細胞の2つの万能細胞を日本人が発見したことは日本の医学業界のレベルの高さであり、未来の医学の進歩に偉大な貢献ができるものと思われます。小保方さんは、英科学誌ネイチャーに掲載されるまで何度も却下されましたが、ハードルにひっかかる度に立ち止り、問題の本質は何かと考え、新しい解決方法を導き出したと言っています。この天才研究者の問題を解決しようとする不屈の精神は、日本人が持つ美しい精神です。また、小保方さんはお祖母ちゃんが作ってくれた割烹着を着て研究に打ち込んでおり、日本人好みの真面目で優しい女性です。

私は日本及び日本経済において、医学業界が果たさなければならない志の高い役割が2つあると思っています。

①1つは「現在(2013年度)41兆円の医療費を半分にする役割」です。

現在で41兆円(保険料20兆円、税金16兆円、自己負担5兆円)、近未来では60兆円、やがてこのままでは100兆円になるかもわからない医療費を画期的な方法で半分程度まで減らす必要があります。今、医療費や社会保障等の増大を消費税の引き上げや若者への負担増でまかなおうとしています。単に薬の価格を下げたり医者の技術料を下げて、高齢化が進む日本ではまかないきれません。今、ビッグデータシステムを適用して適正な薬の利用方法や予防医学が研究され、病人をつくらない、病人になっても薬の適正利用により効果を高め、病気の回復を早くする手法を大胆かつ画期的なレベルで政治決断し、国を挙げて取り組むべきです。

②もう1つは「85歳まで40代の知力・体力・気力レベルで生産年齢人口を増大させる役割」です。

現在、統計的には生産年齢人口は15~65歳で、公務員や民間労働者の定年も65歳です。しかし、日本人の寿命は増々長くなり90歳に近づいています。このままでは医療費のみならず、年金の負担者と非負担者の割合が悪化します。今、日本は少子高齢化で人口増が少なく、かつ高齢者が多くなっています。特殊出生率を高めても30年先に解決するものであり、私は定年を85歳まで将来は引き上げるべきと思っています。そうすると、生産年齢人口は増大し、日本経済の生活面・消費面の活力は維持できます。そのためには、85歳まで精神的にも肉体的にも40代の知力・体力・気力を維持して、まさに元気よく働くアクティブシニアになることが必要です。そこで、万能細胞を中心とした医学界の役割があります。

小保方晴子さん、日本で一番若く、かつ日本での女性初のノーベル賞を受賞して下さい。これが日本人全員の願いです。応援しています。

(株)ダイナミックマーケティング社⁺

代表 六車秀之